

コンプリートデンチャーによる機能回復

村田比呂司^a，越野 寿^b

Oral Rehabilitation utilizing Complete Dentures

Hiroshi Murata, DDS, PhD^a and Hisashi Koshino, DDS, PhD^b

「8020 運動」に象徴されるようにわが国の歯科医師をはじめ歯科医療関係者各位の御努力により、国民の歯の喪失数は減少し、以前に比べると無歯顎者の割合は減少している。しかしながら、依然多くの高齢者が義歯を装着しており、とくに70歳を超えたあたりから全部床義歯（コンプリートデンチャー）装着者が増加しているようである（図）。超高齢社会である本邦では高齢者数は増加しており、無歯顎者の割合は減少しているにもかかわらずその絶対数が増加することも推察される。また従来よりも無歯顎となる年齢も高くなっており、認知症や全身疾患を有し要介護となる高齢者も増加している。さらに学生の模型実習で使用するような骨吸収の少ない顎堤は減少しており、顎堤が高度に吸収し、可動粘膜が歯槽頂を覆っているような症例が増加している。つまり全身的にも局所的にも全部床義歯の治療に不利な、いわゆる難症例が以前に比べ増加しており、日常臨床に苦慮することも多々あるように思われる。もちろん教科書に記載されている基本的な臨床術式をマスターしておくことが基本であるが、難症例に対応するには種々の術式を取り入れることも重要である。

このような背景のもと、第2回補綴歯科臨床研鑽会プロソ'16のシンポジウム3では、無歯顎補綴治療の臨床および研究に精力的に取り組んでおられる新進気鋭の若手あるいは中堅の先生方にご講演いただいた。まず全部床義歯の治療効果の判定や患者個々の治療ゴールの見極めには、補綴装置による咀嚼機能の評価が必要である。この評価方法には摂食可能食品アンケート表、グミゼリーや色変わりチューインガムなど

の試料を用いる方法、下顎運動の計測など種々の方法がある。また口腔関連 QOL などの患者満足度の評価も必要である。北海道医療大学の川西克弥先生にはこれら全部床義歯の「咀嚼機能評価法」について、症例を交えながら手法のみならず有用性と重要性についても解説いただいた。

ついで2名の演者には、最近新しく開発され、治療効果をあげている全部床義歯製作のためのシステムについて、その概念と臨床的手法を詳しく解説いただいた。大阪大学の松田謙一先生は「Biofunctional Prosthetic System (BPS)」というシステムを全部床義歯臨床に取り入れられており、臨床的效果をあげられている。また認定制度を導入するなど本システムの普及にも取り組んでおられる。本講演ではこのBPSの特徴、術式、メリットおよび従来の全部床義歯製法との違いを中心にご講演いただいた。また鶴見大学の新保秀仁先生は「DENTCA システム」というデジタルテクノロジーを応用した全部床義歯製作システムの導入に取り組まれている。また従来型の義歯製作の過程に生理的形態を付与するための「ピエゾグラフィ」も応用されている。ここではこれら術式の特徴、術式、臨床例、通法の全部床義歯との比較を行った臨床評価などについてご講演いただいた。

近年 CAD/CAM 冠に代表されるように、歯科領域にもデジタル化が進み、臨床に応用され実用化されている。全部床義歯補綴領域においても、最近このデジタル化に関する研究が盛んに行われている。この研究をリードしている東京医科歯科大学の金澤 学先生に、近年急速な発達を遂げているデジタルデンティス

^a 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科歯科補綴学分野

^b 北海道医療大学歯学部咬合再建補綴学分野

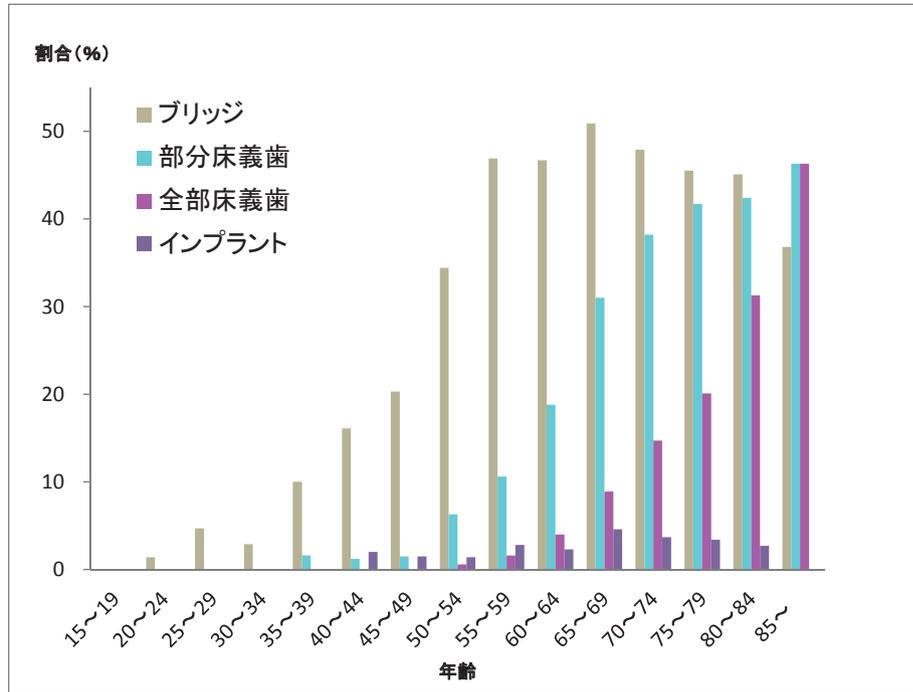
^a Department of Prosthetic Dentistry, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

^b Division of Occlusion and Removable Prosthodontics, Department of Oral Rehabilitation, Health Sciences University of Hokkaido School of Dentistry

トリーの立場から、「CAD/CAM 技術を応用した全部床義歯製作法」について、概要、術式、症例そして最近の研究成果を交え解説いただいた。

全部床義歯補綴に限ったことではないが、実際の補綴処置はできるだけ術者による技術的な差が生じにくく、さらには患者の来院回数が少ない術式が望まれる。そのためには、機能評価などによる術前術後の確実な評価、術式のシステム化の開発、CAD/CAM 技術な

どの先進技術の導入などが必要と思われる。本シンポジウムの4演題はいずれも将来進むべき全部床義歯補綴臨床を示唆している。またこれらは理論に裏付けされた臨床に関するご講演で、臨床に有益な情報を提示できたものと確信している。本論文集がプロソ'16を聴講いただいた先生方には知識の再確認、そして参加できなかった先生方には、今後の研鑽の参考となれば幸いである。



平成28年歯科疾患実態調査データから作成

図 補綴装置を装着している者の割合 (平成 28 年歯科疾患実態調査データから作成)